

博士論文要旨

守家 輝

本研究は後期近代英語期及び現代英語期における *be/have* 完了形の選択傾向について、オーストラリア英語のコーパスを使用し
て行うものである。英語の完了形には、歴史的に移動・変化を表す
自動詞(変移動詞)の完了形として使用されてきた助動詞 *be* と過去
分詞からなる *be* 完了形と、助動詞 *have* と過去分詞からなる *have*
完了形の2種類が存在し、18世紀~19世紀の後期近代英語期までは
be 完了形が変移動詞の完了形として優勢だったが、それ以降 *have*
完了形が発展し、*be* 完了形は急速に衰退した。*Be* 完了形の衰退と
have 完了形が発達に関しては数多くの先行研究があり、特に Kytö
(1997)ではアメリカ英語の方がイギリス英語よりも *have* 完了形の
発達が早いという地域的要因についても分析している。この研究で
は、その他の英語地域変種における *be/have* 完了形の変化を探るた
め、後期近代英語期のオーストラリア英語テキストを収集した歴史
コーパスである Corpus of Oz Early English(COOEE)及び AustLit
と、第一次世界大戦期(1914-1918)の兵士による手記を収集した自
作コーパスである World War I Diaries Corpus (WWIDC)を使用し
て、初期オーストラリア英語における *be/have* 完了形の発達を調査
する。

本研究で主に使用するコーパスである WWIDC は 69 のテクス
トから構成される約 100 万語の自作コーパスであり、第一次世界大
戦に従軍したオーストラリア軍兵士の書簡・日記を収集している。
この他、通時的比較のために 18-19 世紀の多様なオーストラリア英

語テキストを収集した COOEE(約 200 万語)と、オーストラリアの文学作品を収集した AustLit の内 19 世紀に書かれたテキスト(約 280 万語)を用いていく。本研究の対象となる変移動詞は Kytö (1997)のリストに基づく全 157 動詞であり、筆者による先行研究である Moriya (2021)と同様 Rydén and Brorström (1987)のデータに基づき選ばれた 11 種の動詞 (*arrive, become, come, fall, get (action), get (process), go, grow, improve, pass, recover, return*) に関しては別途詳細な分析を行う。また、*be* 完了形と同様 [*be* + PP] の形を取る受動態構文との区別については、*by* 以下で動作主が示されている構文、自ら移動することのない無生物主語を取る構文を除外することで対処する。更に、*- 's(is* もしくは *has* の縮約形)のような 2 種類の解釈が可能な表現に関しても、データから除外することで対処する。*Be* 完了形の減少・*have* 完了形の増加という一般的傾向を受けて Rydén and Brorström (1987)や Kytö (1997)では完了形全体に対する *have* 完了形の比率をもって *have* 完了形の発達度の指標としているため、本研究でも同様の手法を用いることとする。

3 つのコーパス内における *have* 完了形の比率は全て 80%台だったが、WWIDC の値(87.8%)は COOEE の値(82.9%)、AustLit の値(84.1%)と統計的に有意な差があることが分かった。WWIDC における高い *have* 完了形比率の要因としては、WWIDC が最も新しいコーパスであることが挙げられるが、Rydén and Brorström (1987)や Kytö (1997)のデータから予想される 20 世紀初頭の *have* 完了形比率としては 90%未満と比較的低い水準に留まっていたことが特徴的である。また、WWIDC では *land* や *march* といった軍事行動に関する動詞が高い頻度で用いられ、それらの動詞が比較的助動詞 *be* と

共起しやすいことも明らかとなった。このような 20 世紀初頭の軍事的コンテクストにおける用法が、WWIDC における *have* 完了形比率に影響を与えている可能性がある。

続いて、WWIDC における *be/have* 完了形の言語的特徴を分析し、他の 2 コーパスと比較を行う。まず、助動詞の形態に基づく分析からは、助動詞が現在形の時に最も *have* 完了形比率が高いという WWIDC に特異的な傾向が確認された。他の 2 コーパスの分析結果や Kytö (1997) では助動詞が過去形・不定詞形・-*ing* 形の時に *have* 完了形比率が高くなっており、McFadden and Alexiadou (2010) でも仮定法過去の文において *have* 完了形がもっぱら使用されると言及されているため、WWIDC の結果にはこのコーパスに特有の傾向が働いているものと考えられる。次に、WWIDC では否定文において *have* 完了形比率が極めて高いことが分かった。一方 COOEE と AustLit では同様の傾向が確認されず、こちらも WWIDC に特有の要因が働いていると考えられる。最後に、完了形構文に続く補部の有無について分析を行ったところ、COOEE と AustLit では距離や目的地などを表す補部がある場合において *have* 完了形比率が高くなっていたが、WWIDC では補部を取らない構文においても *have* 完了形比率が補部のある場合と同程度であるという違いが確認された。

続いて、19 世紀のコーパスと WWIDC との間の通時的変化を分析する。概ね 25 年ごとに区切られている COOEE の時代区分に従って 19 世紀以前のデータを細かく分析したところ、COOEE・AustLit の両コーパスで Period 1(1788-1825)から Period 4(1876-1900)にかけて *have* 完了形比率の上昇が見られ、オーストラリア英語においても *have* 完了形の発達という現象が起こっていたことが

確認された。また、WWIDC のデータと他コーパスの Period 4 における *have* 完了形比率は互いに近く、19 世紀後半にはこの言語変化が終盤の段階に入っていたことも分かった。Period 1 と Period 3 (1851-1875) においては COOEE と AustLit の *have* 完了形比率の差が大きく、2 つのコーパスが含んでいるテキストのジャンルの違いが影響している可能性が示唆された。次に社会言語学的分析として COOEE・AustLit のテキスト著者の出身地に基づく分析を行う。両コーパスの分析結果から、アイルランド出身の著者たちは *have* 完了形比率が低く、*be* 完了形を高い頻度で用いていることが分かった。一方、時代の新しいオーストラリア生まれの著者たちは *have* 完了形比率が高かった。最後に、COOEE におけるテキストジャンル間の差異を分析する。通時的比較・著者の出身地間の比較に比べてジャンル間にあまり大きな差は見られなかったが、政治的な文書及び演劇等話し言葉のジャンルにおいて *have* 完了形比率が高く、書簡・日記など私的な文書において *have* 完了形比率が低いという傾向が確認された。このことから、オーストラリア英語における *have* 完了形は話し言葉に近いジャンルにおいて発展したと考えられるが、*have* 完了形の発達については規範文法書の影響など上からの変化であるとする Visser (1973) や Anderwald (2014) の指摘もあり、より詳細なジャンル間分析が必要になる。

続いて、11 の変移動詞に関して詳細な分析を行う。その結果、*arrive* や *become* では最も新しい WWIDC で *have* 完了形比率の上昇が見られたが、*fall* や *get* (action) のように WWIDC でも変わらないもしくは *have* 完了形比率が下がっているもの、*improve* や *return* のように全体的に *have* 完了形比率の上昇が遅い動詞も確認された。

また、WWIDCにおいては *become*, *get(process)*, *recover* といった状態変化を表す動詞の方が、*get(action)*, *pass*, *return* といった移動を表す動詞に比べ *have* 完了形比率が高くなる傾向にあることも確認された。COOEE・AustLit に比べ WWIDC で際立った *have* 完了形比率の高さを見せるのが *go* で、他 2 つのコーパスでは *have* 完了形比率が 65% 近くなのに対し、WWIDC では 90% を超えている。また、*recover* も WWIDC では 19 世紀の 2 コーパスと比べ際立って高い *have* 完了形比率を示している。WWIDC の *fall* に関しては特定のコンテキストにおいてのみ *be* との共起が確認され、*get* に関しては *be* 完了形での使用が私的な書簡・日記といった特定のジャンルと関係している可能性が示唆される。COOEE・AustLit を使用した通時的分析からは、全ての動詞で時代を経るに従って *have* 完了形比率の上昇という共通の傾向を示すわけではなく、PDE の WWIDC で急激に *have* 完了形比率が伸びる *go*, COOEE と AustLit の双方で Period 2(1826-1850) から Period 4 にかけて *have* 完了形比率が減少傾向を示す *improve* と *recover* が確認された。

WWIDC のデータが示す特異な傾向については、別途詳細な分析を行う。まず、現在形で高い *have* 完了形比率が確認されたことに関して、過去の行為の結果としての現在の状態を表すことが *be* 完了形の主な用法であるとする McFadden and Alexiadou (2010) の説明とは異なる結果であるといえる。また、Kytö (1997) のデータや COOEE・AustLit のデータからも現在形以外の形で *have* 完了形比率が高くなることが示されているが、WWIDC で特異な結果が見られた要因となっている可能性のある事柄 2 つを以下論じていく。第一に考えられるのはジャンルの違いで、実際に Ritz and Richard

(2021)では警察の調書などのジャンルに特有の現在完了形の用法が見られることを指摘している。ここから、WWIDC が収録している書簡・日記といったジャンルにおいて、現在完了形(*have* 完了形)の使用頻度を増やすような特有の傾向があった可能性も考えられる。第二に、WWIDC が 20 世紀初頭という新しい時代に書かれたものであることによって、*be/have* 完了形構造の使用に関する規範意識が希薄になっている可能性が考えられる。Tejedor (2020)で指摘があるように、*be* 完了形は 20 世紀オーストラリア英語において使用が確認されるものの、その頻度は 19 世紀に比べて大きく減っている。使用頻度が減ったことにより、*be* 完了形は現在形で使うべきという規範意識の働きが希薄になった可能性がある。この仮説を立証するために、他のジャンルにおける 20 世紀オーストラリア英語の *be/have* 完了形の使用傾向を調査する必要がある。

また、WWIDC では否定辞 *not* と共起する文脈において、*have* 完了形比率が高くなるという傾向が確認された。この傾向自体は Kytö (1997)でも確認されていることだが、一方でこれは仮定法過去の文脈において *have* 完了形比率が高くなることの副産物であるという McFadden and Alexiadou (2010)の指摘もある。可能性のある説明として、一部の動詞において否定文よりも肯定文で現れやすいというバイアスがかかっていることが考えられる。WWIDC では前述の通り *land, march* といった動詞が多く用いられ、それらの動詞で *be* との共起が起こりやすいという傾向が見られたが、そのような動詞は否定文においてはほとんど現れなかった。このように特定の動詞の選択が *be/have* 完了形比率と関係しているかどうかを検証するた

め、他のジャンルのテキストとの比較が必要である。

第3に、WWIDCでは補部の有無が *have* 完了形比率の高さに影響しないという特徴について考察する。McFadden (2017)によると、真の完了形構文は、方法や目的を表す副詞句との共起によって *be gone* 等のような形容詞的な構文から区別されるという。ここから、*have* 完了形の構文の方が *be* 完了形に比べて方法や目的を表す補部と共起しやすいという傾向が予想されるが、実際頻繁に用いられる *come, go* の2動詞に関しては、WWIDCでも補部ありの場合で *have* 完了形使用率が高くなることが分かった。すなわち、本コーパス内で *be* との共起頻度が高い *land* や *march* といった動詞が、補部のある構文中で頻繁に使用されていることが1つの要因であると考えられる。

続いて、頻度の高い *come* と *go*、並びに19世紀のデータで特異な傾向を示した *improve* と *recover* について詳細な分析を行う。Moriya (2020)のデータによると、*have gone* の増加においてアイルランド出身著者のテキストだけが特異な傾向を示している。また、アイルランド系の著者によるテキスト数が多い COOEE の Private Writing ジャンルも *be* 完了形の比率が高い他と異なる傾向を示す。このことから、元来オーストラリアのアイルランド系移民において主に見られた傾向が20世紀以降の世代のオーストラリア英語において見られなくなっており、そのことが WWIDC における高い [*have gone*] の比率に影響していると考えられる。また、意味的観点からも補部のある構文が多いことなど、複数の要素が影響している

可能性が示唆される。

Improve と *recover* に関しては、先行研究においても *be* 完了形の使用が他の動詞に比べ長く続いたことが指摘されているが、COOEE・AustLit データに見られるような明らかな *have* 完了形比率の減少傾向はオーストラリア英語特有の要因によるものである可能性がある。ただし、両動詞とも *Oxford English Dictionary* の原義は他動詞であり、また他動詞と自動詞の用法に意味上の区別が少ないことも特徴として挙げられる。また、これらの動詞は移動を表す動詞と違い、主に *have* 完了形で表される動作の継続・反復といった意味を表すことも少なく、このことも *be* との共起しやすさに影響を及ぼしている可能性がある。WWIDC ではこれらの動詞の *have* 完了形比率は増加しているが、これもジャンルに特有の傾向であるかもしれない、より幅広いジャンルのテキスト分析が必要となる。

結論として、WWIDC を用いたオーストラリア英語の調査では、後期近代英語期から 20 世紀初頭にかけての *be/have* 完了形使用の変化に影響しうる要因をいくつか発見し、また WWIDC 特有の傾向も示された。具体的には、現在形のコンテキストにおいて *have* 完了形比率が高くなること、否定文において *have* 完了形比率が高くなること、そして補部の有無が *have* 完了形比率の高さにあまり影響しないことである。こうした傾向から、*have* 完了形の発達という現象はテキスト毎に特異な傾向を見せた可能性が示唆され、より広範囲にわたる初期オーストラリア英語の研究が今後必要とされる。

参考文献

- Anderwald, Lieselotte. 2014. The decline of the BE-perfect, linguistic relativity, and grammar writing in the nineteenth century. In Marianne Hundt (ed.), *Late Modern English syntax*, 13-37. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kytö, Merja. 1997. *Be/have* + past participle: The choice of the auxiliary with intransitive from Late Middle to Modern English. In Matti Rissanen, Merja Kytö, and Kirsi Heikkonen (eds.), *English in transition: Corpus-based studies in linguistic variation and genre styles*, 17-85. Berlin: Walter de Gruyter.
- McFadden, Thomas. 2017. On the disappearance of the BE perfect in Late Modern English. *Acta Linguistica Hafniensia*, 49(2), 159-75.
- McFadden, Thomas and Artemis Alexiadou. 2010. Perfects, resultatives, and auxiliaries in earlier English. *Linguistics Inquiry* 41(3), 389-425.
- Moriya, Akira. 2020. The alternation of *be/have*-perfect forms in early Australian English texts by nineteenth-century settlers. *Zephyr* 32, 1-20.
- . 2021. Uses of *be/have*-perfect forms in Late Modern Australian literary texts. *Zephyr* 33, 1-18.
- The Oxford English Dictionary* [OED], 2nd edition. 1989. Oxford: Oxford University Press.

- Ritz, Marie-Eve, and Sophie Richard. 2021. The functions of the auxiliary 'have' in Australian English vivid narratives. In Kristin Melum Eide, and Marc Fryd (eds.), *The perfect volume: Papers on the perfect 217*, 461-78. Amsterdam: John Benjamins.
- Rydén, Mats, and Sverker Brorström. 1987. *The be/have variation with intransitives in English: With special reference to the Late Modern period*. Stockholm: Almqvist & Wiksell International.
- Tejedor, Gemma Plaza. 2020. The development of perfect auxiliary verbs *be* and *have* in Early Australian English (1788-1937): A corpus study. *Estudios Interlingüísticos* 8, 193-208.
- Visser, Fredericus, Theodorus. 1973. *An historical syntax of the English language: Part 3, Second half*. Leiden: E. J. Brill.